2021.06.10

新型コロナ・ウィルス

小嶋祥三

今日、コロナ・ワクチンの第 1 回目の接種を受けた。今のところ、身体に異常はない。

新型コロナの感染者数は、上昇と下降の波を繰り返し、収まる気配がない。私権の制限が緩やか中で、結局、切り札のワクチンに頼るしかないようだ。ここのところ、東京の新型コロナ・ウィルスの感染者が減少している。いいことだが、それでも目標よりは多い。一方、人流（ヘンな言葉だ）、すなわち、人出は増えているらしい。これらの現象について、行動理論的な理解を試みる。

感染者数が減ったというが、それは 10 日から 2 週間前の行動の結果なのだ。この行動に対する結果の時間遅れは、いわゆる強化の遅延で、学習が成立しにくいことが知られている。外出を控えるなどをした結果が、10 日から 2 週間後に出るのでは、分かりにくい。感染の波が繰り返される原因の一つだろう。テレビで識者が、この感染者の減少を励みに一層の努力を、と言っている。その通りなのだが、その点をもっと強調できないのだろうか。感染者の減少は、コロナ・ウィルスに対する対策をさらに強めろというサインなのだ。

感染者が減少したと聞けば、家にこもっているのにウンザリしているので、外に出たくなるのは仕方がないことかもしれない。これには遅延価値割引 delay discounting が関係する。すなわち、時間的に近い小さな報酬と遠い大きな報酬の選択の問題だ。今、我慢し行動を抑制すれば大きな報酬（すなわち、コロナ克服による日常生活）が得られるかもしれないのだが、時間的に先のことなので、したがって不確実な面もあり、その価値が値引きされてしまう。一方、長引くコロナ対応にウンザリしているので、感染者数が減少したと聞けば、目の前の小さな報酬に飛びつきやすい。遅延価値割引は衝動性と関係するが、長引くコロナ対応は衝動性を高め、目の前の報酬の価値（例えば、飲み会や会食）を高めるだろう。感染者数が減少する中で、人出が増える原因の一つだろう。

麻生副総理だったと思うが、日本はコロナには民度で対応すると言っていた。私権の制限を最小限にして、要請ベースで日本人はよくやっていると思う。それでも限界がある。今回の新型コロナ・ウィルスは難敵なのだ。